

訓練は誰のために

今年の元旦、能登半島での大地震による多くの犠牲者、また、家屋の倒壊や火災による甚大な被害が報道を通して耳に入ってきました。今も（1月17日現在）なお多くの住民が避難所生活を余儀なくされており、ライフラインが復旧していない自治体も数多く報告されています。また、翌2日に発生した羽田空港での航空機の衝突事故では、炎上した2機の映像が映し出され、事故の大きさに衝撃を受けました。災害や事故でお亡くなりになられた方のご冥福と、被災された方にお見舞いを申し上げます。また、地震や津波そして火災の被害が大きかった地域には1日も早い復旧・復興を願うとともに、航空機事故については原因究明が急がれるところです。

今回の航空機事故において乗客全員が無事避難できたことは、客室乗務員の的確な指示とそれに従った乗客の行動によるものが大きいとの報道を見て、私の教頭時代の経験を思い出しました。当時私は小学校の教頭で、火災の避難訓練について実施計画の説明を受けていました。担当者の綿密な計画を聞き「これなら、火災による避難は適切に行われる」と確信して、訓練の日を迎えました。当日は、消防署員も数名来られて、私たちの訓練に対して指導・助言をいただくことになっていました。子どもたちは見事に火災発生場所から離れるルートで整然かつ短時間で避難しました。私も児童に対して、避難の仕方、避難時間、そしてその真剣さについて大いに褒めた記憶があります。しかし、消防署員の視点・評価は違いました。「子どもたちは大変素晴らしい。課題は先生方の意識です。」とはっきり言われました。「火事が起こった時、先生方は大きな声を出さないのでですか?」「なぜ、黙って子ども達の避難の様子を見ているのですか?」「教職員のための訓練でもあることを認識しておられますか?」子ども達の避難意識・避難行動を高める指導を重視するあまりに、最も大切な教職員の避難指示訓練である意識が薄くなってしまったことへの強い指導でした。以後私は、教職員に対して、児童には的確な避難指示を出すこと、想定外の状況では自らが判断しなければならないことがあること、そして、何が何でも子どもたちを守ることを意識して訓練を重ねることを伝えてきました。航空スタッフが乗客の命を守るプロであるなら、学校職員は子ども達の命を守るプロでなければならないのです。

これから厳冬期に向かう北海道は、地震や津波だけではなく、暴風雪など気象の急激な変化や、路面状況の変化に伴う事故など、様々な危険が想定されます。教育委員会といたしましても、町内の各学校や各施設と情報を共有するなど連携を図りながら、児童生徒、教職員や施設職員の安全を図ってまいります。

令和6年1月

厚岸町教育委員会
教育長 滝川 敦善